

中井正一における三木清からの影響についての再考  
—中井の三木への批判的眼差しと肯定的眼差しの交錯に焦点を当てて

後藤嘉宏\*

Reconsideration on the Influence on Masakazu Nakai by Kiyoshi Miki:  
Focusing on the contradiction between the critical opinions  
and the affirmative opinions of Nakai towards Miki

Yohihiro GOTO

抄録

中井正一は三木清から影響を受けているが、三木の個性、独創性信仰に対しては批判的な眼差しももっていた。

本稿は中井の三木への評価の肯定的眼差しと否定的眼差しの双方を、中井の全著述を通じた三木への言及から、見ていく。

中井はメディウムよりミッテルを、ということをはほぼ終生にわたって唱えた。著述家三木に対しては狭い意味での個性志向を示しメディウムを脱しえなかったと評する一方で、実践家三木に対してはミッテルの実践をしたと、高く評価する。

両者の眼差しの矛盾を考察することで、ソクラテス流の文字に自分の言葉を残すよりも対話をというミッテルの媒介の典型の姿を、中井は三木の実践に見据えていることが分かった。

Abstract

Although Masakazu Nakai had influenced by Kiyoshi Miki, Nakai had a negative viewpoint for the Miki's belief of individuality, originality.

This paper reconsider the contradiction between Nakai's affirmative opinions and his negative and critical opinions to Kiyoshi Miki, through all over the writings of Nakai.

Nakai had asserted that we must seek Mittel, not Medium. Nakai considered writer Miki as a man of Medium, and considered activist Miki as a man of Mittel.

Reconsidering the contradiction between Nakai's affirmative opinions and critical opinions, we find that Nakai regarded activist Miki as Socrates, who did not want to write at all, and who was a founder of the oral dialectic, that is, one on the roots of Mittel.

\* 筑波大学図書館情報メディア系  
Faculty of Library, Information and Media Sciences  
University of Tsukuba

## 1. 問題の所在

中井正一は京大哲学科美学美術史教室の出身であるが、京大哲学科の「二年先輩に三木清、一年先輩に戸坂潤があり親交を結ぶ」(稲村1981 373)と、『中井正一全集』第四巻の書誌学者稲村徹元による年譜には記されている。

この全集は中井を『世界文化』同人として支え、また中井宅の居候をしていたこともある久野収の編集によるものである、そのこと自体に誤りはないはずである。しかしその中身の吟味はまだ不十分であると考え、本稿の執筆に至った。

その際、手がかりとするのが、中井正一におけるメディアウム、ミッテル二つの媒介概念である。これを巡っては杉山(1983)と稲葉(1987)で解釈の対立があり、後藤(2005)でそれらを整理し、大窪(2016)や後藤(2016)では表に整理している。

ここでは後藤(2016)を一部修正の上<sup>1)</sup>、表1として再掲する。

なお後藤(2017a)後藤(2018)ではメディアウムを西田哲学、ミッテルをそこからの乗り越えを意味すると解している。そのことは詩人の栗田勇も傍証している(鶴見ほか1963 81)<sup>2)</sup>。

国立情報学研究所のCiNiiで「中井正一 and 三木清」を入力して検索し、でてくるタイトルは5点ある(2018年9月20日現在)。それら5点は古い順に、後藤嘉宏「三木清の公共圏の構想と中井正一—二人の商業ジャーナリズムへの距離の置き方の違いを軸にして」『図書館情報メディア研究』4(1), 1-27, 2006、後藤嘉宏「中井正一の理論にみられる三木清『パスカルにおける人間の研究』(1926)からの影響について」『図書館情報メディア研究』6(1), 27-41, 2008、門部昌志「中井正一に

おける言語論への移行の問題(1)中間者をめぐって」『研究紀要』長崎県立大学(15), 69-84, 2014、荻部直「技術・美・政治：三木清と中井正一(科学と政治思想)」『政治思想研究』(14), 65-81, 2014、山田正行「三木清の生と死：聖の遍在(Allgemeine das Heilige)のもと時を生き死ぬ(zeitigen)」『大阪教育大学紀要 人文社会科学・自然科学=Memoirs of Osaka Kyoiku University』66, 151-169, 2018となる。

そこでこれらを順次批評する。

後藤(2006)は三木清の京大でのアリストテレス読書会や学会横断的な『新興科学の旗のもとに』での活動を念頭におきながら、中井が三木清の公共圏の構想を引き継ぎ、彼の『世界文化』や『土曜日』の実践を行った点を論じ、なおかつ、三木の商業主義的な部分については中井は乗り越えを図った点を指摘している。しかし本稿で扱うような個性志向の著述家三木への批判と、それを行動面では乗り越えている実践者三木への肯定的評言というような観点は、この先行研究にはない。特に中井のこのような商業主義批判の延長上に、中井の個性志向を越えた集団主体の議論がある点を本稿は示したい。先ほどの表1に即すると、個性志向は自分のなかで完結するという意味で「一方向的」で「本」を志向するメディアウムに親和性がある。他方集団主体は自分のなかでは完結しないという意味で「双方向的」で「会話」を志向し、大衆に語りかけるミッテルに関連性が高い。

後藤(2008)は、中井のメディアウム、ミッテルの原型を三木清の『パスカルにおける人間の研究』の中間者の弁証法、次元越えの弁証法にそれぞれ求めている。その点は、本稿も踏襲したい。しかし後藤(2008)は三木清の『パスカルにおける人間の研究』とその中井による書評(1926)にほぼその対象を絞り込み、よって三木から中井への一方的な影響という肯定的部分の指摘がほとんどである。その点に難点がある。

門部(2014)は中井の1927年の論文「カント第三批判序文前稿について」をその成立の経緯まで丁寧に辿って分析した点で秀抜な論文で、タイトルには三木の名前はないが、キーワードに挙げてある。三木についてはこの中井の論文がカントの中間者を巡る考察であるので、中間者との絡みで言及がなされる。とくにカントのMittelgliedの訳語が中間者と定着したのは、大西克禮が1932年にカント『判断力批判』(第三批判)の邦訳をだしてからであるという。他方、この書の邦訳を中断した深田康算の未定稿がでたのも1930年の深田康算全集で、中井が編集に携わったこの全集以前にも中井が指導教授深田のこの訳稿をみていた可能性もあると指摘する。さ

表1 メディアウムとミッテルの見取り図

メディアウムの	ミッテル的
媒介物・媒体	媒介する コミュニケーションする
モノ的	コト的
固定	流動
理論・体系	実践・素材
知識人	大衆
本	会話
安定的、自己肯定的	自己否定的
身分的、固定的	流動的
形而上学的、実体概念的	機能概念的
知識人と大衆の断絶	知識人と大衆の互換性
一方向性	双方向性

らに深田の授業でこの訳語を知った可能性もあるとされる。しかし門部はそれらのいずれも可能性にすぎないと指摘する。他方中井がこの訳語を思いついた源泉として、門部は1924年『思想』に載ったホフマンの「プラトンとカント」において「中間的な国」「中間者」が示された点に着目する。この邦訳は三木清の手になるもので、さらにそれが三木の1926年刊行の処女作『パスカルにおける人間の研究』の中間者 milieu へと発展する、とする。「(カントの *Mittelglied* とパスカルの milieu という)異なる言語、異なる思考体系に埋め込まれていた言葉が、「中間者」という同じ言葉に置き換えられたことになる」(門部2014 80 [( )は後藤記])。同年中井は京都哲学会の『哲学研究』に三木のこの書への書評を載せるが、この書評に門部は言及し、これが三木と中井を巡る「中間者」の接点であるとする。ただ門部は中井のこのカントやパスカルでの「中間者」が中井のメディアム、ミッテルにつながりうるという方向性を杉山(1983)に依拠して示すのみで、どのようにつながるかについてはこの論文では言及していない。他方門部(2014)に先行する後藤(2008)でも中井によるこの1926年の書評に着目しているが、後藤(2008)はこの点、さきにも述べたようにある程度メディアム、ミッテルとのつながりを示している。三木の『パスカルにおける人間の研究』における次元越えの弁証法はミッテルであるのに対して、次元を越えない限りは中間者の弁証法である、と。後藤(2008)のその指摘への是否も含めて、メディアム、ミッテルの中身とこの書評との関係について、門部(2014)の言及はない。本稿はこの面では後藤(2008)の議論を踏襲する。

苅部(2014)は、技術論における中井と三木の相互の影響関係について論じている。三木が独仏留学中にハイデッガーのアリストテレス解釈にふれ、それを中井らに伝え、中井の読書界へのデビュー作「機械美の構造」(『思想』1929年)での技術理解に通じているという。他方、三木が技術についてはじめて論じるのは1934年の「技術の精神と文学のリアリズム」(『読売新聞』)であると苅部(2014)はいうが、個人の実存から発するデモニッシュな創造への意志を技術の重要な要素に位置づける三木のこの論文は、中井の技術論とは違うと指摘する。扱う対象については技術論ではない本稿とは違うが、三木の個性志向と中井の集団志向の対比を捉えている点で、苅部の視座は本稿と類似した立場から、三木と中井の影響関係を扱っているといえる。なお苅部(2014)はハイデッガーのナチス協力表明で三木が旧師ハイデッガーと訣別し、ロゴスの力への信頼として『構想力の論理』を

書き進めたことや岩波の大教育家文庫の一つとして『アリストテレス』を著したこと等を記す。しかしそれらの著作と中井との比較や中井への影響までは論じていない。本稿は『アリストテレス』にまでは及ばないがその代わりに、『構想力の論理』と中井の関わりについて論じる点で、苅部(2014)の行っている領域とは違う領域の研究であるといえる。

山田(2018)は三木の獄死の意味を諸方面から考察した、推理物のようなスリリングな論文で、本稿でも大きく取り上げるであろう「三木君と個性」も扱っている。この山田(2018)のI序の次のIIは「中井の三木論-「三木君と個性」を切口に-」である。II以外も含めて三木をパスカルの賭になぞらえて分析する山田(2018)の視座は、パスカル論からの中井への影響を大きく見積もる後藤(2008)及び本稿の立場と、共通する。ただしこの「三木君と個性」の「個性」を三木の『構想力の論理』等での天才や個性志向の延長上に捉える点で、本稿の立場とは違う。本稿では三木の構想力や個性志向への中井による批判をさきに示し、次にその批判の延長上であえて中井は「三木君と個性」とタイトルをうったと考える。つまり著者三木の個性志向を越えた「個性」を、実践者三木に見いだしたと。また山田(2018)は西田哲学の影響下に三木も中井も捉えるが、通常理解において三木はそれで基本よしとされようが(もっとも内田(2009)は三木についても、『構想力の論理』が西田批判と田辺批判双方を意図しているという)、中井については西田からの影響は強くあろうがむしろ田邊元の西田批判に強い賛意を示しているだけに、西田批判が中井の根底にある。そもそもメディアムとミッテルを分け、「委員会の論理」(1936)等でメディアムからミッテルへという趣旨のことを語るのも、メディアム的な西田哲学への批判があると<sup>3)</sup>、後藤(2017a)は示している。

なお本稿のテーマと直接には無関係ではあるが、中井の「三木君と個性」における、「才能なきものどもの伏線にかかって」の「才なきもの」の典型例に、山田(2018)が和辻哲郎を挙げるのには合点がいかない。中井がこの文章(中井1981a 340)で示す幻の三木京大助教授人事の阻止に和辻が関わったかどうかについては仮に和辻の関与がありうるとしても、山田(2018)が彼の論文の後半で示唆した、終戦後にもかかわらず解放されずに獄死させられた三木の生命の追い落としに和辻が「御用学者」として暗に関わったことは到底考えられないと本稿の筆者は考えるからである。「和辻が京都・東京の帝大教授となり、三木が獄死したのは逆選抜の典型である。和辻は代表例であり、その下には同類が多い。和辻と同類

は、戦後の民主化により三木が解放され、しかも思想・イデオロギーにおいて戦争責任が追及されると苦しい立場に追い込まれたことだろう。・・・元々卑怯な「小人」だから御用学者になった。公安の上層部は、このような御用学者に意見を求め、その文化資本を以て決定を補強し、責任を分散させた」(山田2018 156)。このように戦後の三木の復権を阻止した御用学者として和辻を描くにもかかわらず、岩波茂雄の貴族院議員選挙に肩入れしたことも三木が当局から睨まれる一因になったと山田は記す。しかしここには大きな矛盾がある。というのも岩波茂雄が右翼の大物蓑田胸喜の暗躍により津田左右吉と共に起訴された際に、津田の弁護人を引き受けたのは他ならぬ和辻である(佐藤 2013 192-195)からである。しかも岩波に相談されて、弁護人に和辻が適任と岩波に薦めたのは、久野収と羽仁五郎で(佐藤 2013 191)、いずれも戦後『三木清全集』の編者となる人物である。三木が岩波の議員選挙に肩入れして当局から睨まれるのなら、和辻は当然それ以上に当局から睨まれよう。しかも山田(2018)が三木の発言として引いている三木の座談会「西田幾多郎を囲む座談会」の出席者の一人は、三木の親しい友人で『共産主義的人間』に「三木清の思い出」を取めた林達夫である(この種の座談会で三木が人選に大きくかわらないことは想像しがたい)。ところが愛妻家で知られる和辻の妻と林の妻は姉妹であり、また林は谷川徹三とともに和辻を手伝って『思想』(岩波書店)の編集をしていたこともある。和辻に三木への嫉妬があったかどうかについてはその可能性を判断する材料を本稿の筆者はもち合わせないが、いわば和辻の身内である林の親友を、帝大教授の地位と榮譽をもつ和辻がそこまで追いつめることは考えにくい<sup>4)</sup>。また同じ座談会「西田幾多郎を囲む座談会」の出席者の一人でもある谷川徹三も和辻の親友とされる人物で三木在職とはほぼ同時期から法大教授であるが、和辻の没後、和辻の蔵書を法大図書館が引き取るように働きかけた人物で、その後、法大総長にもなっている。谷川は龍野公園の三木の記念碑の建造のための寄付をした一人でもあるばかりか、中井の「三木君と個性」によると深田康算邸に三木が留学からの帰朝の挨拶に訪れた際、三木と連れ立って来た人物とさえ記されている<sup>5)</sup>。

以上、先行研究は後藤(2006)や荻部(2014)に中井と三木との違いへの言及はあるものの、そこでも彼らに三木の思想がどのように中井のなかに組み込まれ、どう中井が批判し乗り越えたかまでの議論はないため、中井が三木の強い影響を受けたという全集年譜の記述を越えることがない。したがって中井が単に三木の取り巻きの

一人であるかのような印象を先行研究は与えかねない。本稿では単に商業主義に対する肯定・批判等の姿勢・態度における二人の違いにとどまらない、三木と中井との共通性と違いを改めて吟味し、中井がどう三木を乗り越えようとしたかに言及したい。またそのことによって稲葉(1987)や杉山(1983)を受け継いで後藤(2005)や大窪(2016)や後藤(2016)が示した中井のメディウム、ミッテル関係への理解の深化が図れると考えたい。

## 2. 三木清の『パスカルにおける人間の研究』(1926)からの中井正一への影響

後藤(2008)の議論の再整理であり、ある程度門部(2014)とも重複するし、本稿1.でも概略ふれたが、今後の議論に大きく関わるので、ここで改めて三木の『パスカルにおける人間の研究』(1926)が中井に与えた影響について簡単にみておく。

三木の『パスカルにおける人間の研究』(1926)では数学者パスカルの次元の相違の議論に着目する。線はどれほど長くても線であって面にはならないし、面はどれほど広げても立体にはならない。パスカルや三木の言葉ではないが、より分かりやすくいうと、線と面と立体は、メートルと平方メートルと立方メートルという単位の次元が違うことから分かるように、それぞれ次元が異なる。次元という訳語のパスカルの元の言葉はフランス語の *ordre* であるが、*ordre* には秩序の意味もある。これを人間の三つの秩序にパスカルは置き換えていると三木は理解する。物質・肉体の秩序、精神の秩序、慈悲の秩序の三つである。この秩序は世界といかえてもおそらくは通じる。

線はどこまで長く延長されても面にはならない。それと同様、物質の秩序でいくら豊かさを獲得しても、要する金銀財宝にいくら恵まれても精神の秩序の豊かさには至れない。面はいくら引き延ばしても立体にはなれない。それと同様、精神の秩序でどれだけ豊かになっても、要するにいかに学識を蓄えても、慈悲の秩序、いわば宗教的な愛(アガペー、カリタス、チャリティ、シャリテ)の世界には至れない。線と面と立体の間には越えがたい次元の相違の壁がある、それと同様、物質の秩序、精神の秩序、慈悲の秩序相互にも越えがたい壁があると、三木はパスカルに即して語る。

また三木はこの書で人間を中間者として捉えている。人間は偉大と悲惨の両極に挟まれた中間者である。そしてこの中間者はメディウムである。自分たちと地続きの同じ次元のなかでの弁証法である。他方「あれかーこれ

か」を経て決断し改心すると、違う次元に飛び込みうる。中間者から脱する。よって、これはミッテルであると後藤（2008）は、三木のテキストを中井のタームに引きつけて、結論づけた。したがって中井のミッテルの弁証法－次元の違う異質な他者になりきる弁証法－として、この中間者から脱することは捉えられると解した<sup>6)</sup>。その点で中井の終生追究したメデイウム、ミッテル関係の原型が『パスカルにおける人間の研究』（1926）にあると後藤（2008）は論じている。

この見解は後藤（2006）の三木の公共圏の構想の延長上に中井を理解する見方にもつうじる。三木の公共圏は独仏留学中のハイデルベルクの哲学学徒たちがアカデミックフル（専門馬鹿）になっている現状に三木が憂えて、帰国後京大でアリストテレス読書会をはじめたことに端を発する（山田1975 130-131）。当初はこのように哲学科内部の異質な専門の他者との対話であったが、羽仁五郎と一緒に出した『新興科学の旗のもとに』では（マルクス主義の方法をとる学問のなかでの、という限定はあるが）異分野、異なる大学との交流に発展し、さらに法大を辞職に追い込まれてからは筆一本で食べていく必要性からも民間アカデミズムの形で、学問を専門にしない人たちとの対話に発展していく。いわばそこで志向されるのは次元の違う異質な他者との対話、ミッテルであると考えられる。この流れは1935-37年の中井の『世界文化』『土曜日』の実践にもつうじる。京大美学関係者を中心にいくばくかの東大、早大卒業生も加えた美学畑の同人誌『美・批評』（第一次）が京大瀧川事件を経て、武谷三男のような物理学科の俊英も加えた多様な人材の集まる『美・批評』（第二次）、『世界文化』へと展開する過程は、三木のアリストテレス読書会から『新興科学の旗のもとに』への流れを彷彿とさせる。さらに隔週刊新聞『土曜日』は京阪神地区の喫茶店に購入され、そこで廻し読みされることを想定し、読者の投稿でのみ成立する新聞をめざした。したがって完全に次元の違う異質な他者との対話が志向され、三木の民間アカデミズムと類似し（ただし後藤（2006）で記したように、三木の場合は商業ジャーナリズムに肯定的な民間アカデミズムであるのに対して中井はそうでない点に違いはある）、ミッテルとしての双方向的な対話がなされたと想定できる。

以上中井は彼が終生追究することになるミッテル志向を三木清の実践から学び、かつ三木の処女出版とされる『パスカルにおける人間の研究』からメデイウム、ミッテルの基本的な着想を受けとっていると、後藤（2008）の議論のかぎりでは、いえる。そのかぎりでは、中井は三木清というお釈迦様の掌の孫悟空であるかのようであ

る。しかし本稿4. でのちに論じるように三木への批判も中井はしている。それを次々章4. で論じたい。その前提として、4. での分析に必要なかぎりでは、三木『構想力の論理』の個性志向について3. で概観したい。

### 3. 『構想力の論理』における個性志向、天才賛美

三木が『思想』に連載し完成をみずに没したため遺稿となった『構想力の論理』は三木の代表作の一つとされるが、『パスカルにおける人間の研究』で哲学に目覚めたとする中村雄二郎のような俊才であっても、なかなか読みづらくてじっくり来ないと漏らす<sup>7)</sup>。他者への言及が多いこともその理由の一つと推察されるが、本稿の筆者も言及の多さ、とくに時代状況もあってか多方面に目配りした全方位的な言及から、三木の本当にいいたいことの繋がりを掴みづらくしていると感じている。

そこでここでは社会学者として個性、獨創性を巡って対立していたといわれるタルドとデュルケムへの言及にある程度焦点を当てて分析していく。

#### 3.1 「個性について」での三木清の個性志向

本稿3. で個性志向という観点で三木の『構想力の論理』を読んでいこうとするが、その前史として三木によるロングセラーアイテムである『人生論ノート』の「個性について」を少しみておこう。

この論攷は京都哲学会『哲学研究』に三木の著述としては最初に掲載された文章で、1920年のものである。『人生論ノート』所収の文章でこの「個性について」と「旅について」以外の諸篇は、1938年から1941年に雑誌『文學界』に連載されたものである。この1篇だけ他と18年以上の開きがある。

「私にして「観念の束」に過ぎないとすれば、心理学者が私を理解しようとして試みる説明は正当である。彼等は私のうちに現れる精神現象を一定の範疇と法則とに従って分類し、総括し、また私の記憶が視覚型に属するか、聴覚型に属するか、更に私の性格が多血質であるか、胆汁質であるか、等々、を決定する。けれども抽象的な概念と言語はすべてのものから個性を奪って一様な黒塊を作り、ピーターとポールとを同じにする悪しきデモクラシーを行うものである」（三木1954 140-141）。

このように法則定立科学である自然科学に典型的にみられる一般化的方法を、心理学者は人間の心という本来個別性の大きい領域にまで組み入れようとしている点を、批判的に描く。法則に収まらない個性が個々人に

はあるという論点が明示される。これは個性記述科学である歴史的文化科学と法則定立科学である自然科学とを峻別したウィンデルバントの議論を批判的に受け継ぎながら、個性化的方法と一般化的方法とを分けたリッケルトの方法論をそのまま哲学的エッセーにしたものともいえる。事実、三木からの上記引用文にある「ピーターとポール」はリッケルトの著作にも登場する（順序は逆で発音は三木はドイツ語ではなく英語であるが）。「歴史的諸科学は、パウルにもペーターにも同じ様によく合ふ「既製服」のみを作らうとは欲しない」（リッケルト1898→1939 101）。実際にドイツに行き行って会って来て失望するにいたるものの、三木の独仏留学の最初の訪問先がリッケルトであったこともこの「個性について」から十分に頷ける。このように三木はその出発点から個性志向が著しかった。

### 3.2 「構想力」の着想

ここで中井と三木との影響関係で『構想力の論理』を眺め読む前提として、三木において「構想力」に着目するのがいつなのかという問題が大きくかわるので、その点を簡単に確認したい。というのも『構想力の論理』の第1巻が著書として纏まるよりも前に、まず、岩波書店『思想』に連載されたが、それでも1937年5月号からで、他方中井の戦前の代表作「委員会の論理」が前年1936年の1-3月号であり、なおかつ中井が「構想力」というものの乗り越えを意図したと思われ、本稿4.でとりあげる諸論攷は、それよりさらに前の時期に遡るからである。しかも、三木自身が『構想力の論理』の完成を意識して連載し、それらを一冊の著書にまとめたという『哲学ノート』は、『知性』の1939年1月から9月までの連載が主な材料で、それに過去の他の諸篇を加えたものであるからである。

幸い三木清の専門家として知られる内田弘が「三木清『構想力の論理』の問題像・形成過程・論理構造」というここで求めている要請そのものズバリのタイトルの論文を、『専修経済学論集』43(3), 1-43(2009)に書いている。本稿の筆者は三木の専門家ではないので、この3.2節ではそれに大きく依拠して話を進めたい。

内田は三木の「構想力」の着想の端緒について、1.1「『構想力の論理』の形成過程」の最初に次のように述べる。「三木清が「構想力問題」の端緒をつかんだのは、いつのことであろうか。それは遅くとも『思想』に「構想力の論理」を掲載する1937年より13年前のことである」（内田2009 1）。三木のマールブルグ大学留学中の1924年には「構想力の論理」につながる文章を書いているとする。

では「構想力」という用語が実際に最初に現れたのはいつで、何が契機か？内田は次のように記す。「用語「構想力」を明示した最初の論文「世界観構成の理論」の公表時期「1932年4月」という年月は重要である。1931年9月18日の「柳条湖事件」、いわゆる「満洲事変」が勃発した6カ月後に、三木清は「構想力問題」を提示する。この6カ月後という期間の短さを考慮すると、満洲事変が起こった、まさにそのとき、三木清は「構想力問題」を着想したと推定することができる」（内田2009 2）。なお、三木清全集第5巻の「後記」を信じるなら「世界観構成の理論」は1933年4月の『理想』39号所収の論文で1932年4月ではない<sup>8)</sup>。この論文はその後『哲学ノート』に再録されている。内田(2009)も引いているが、この三木の論文で構想力は次のように記されている。「構想力 *Einbildungskraft* が特別に感情と関係のあることは、これが芸術の能力と考へられることから理解されよう」（三木1967a 70）。この文に続いてはロゴスとパトスの弁証法的関係について論じられていく。このロゴスとパトスの関係は『構想力の論理』以上に『哲学ノート』に頻出のタームであり、『哲学ノート』は「序」で「ここに収められた諸論文は如何にして、また何故に、私が構想力の論理というものに考え至らねばならなかったかの経路を直接或いは間接に示している」（三木1957 3）と三木自身が語っているだけに、『哲学ノート』に再録された「世界観構成の理論」での「構想力」は単にカントの哲学用語の訳語という以上の意味を担っていることになる。

以上、内田(2009)に依拠しつつ三木の「構想力」の着想は1924年に得られ、その語を論文に記すのは1933年4月で、その契機は内田の説にしたがえば1931年9月18日の「柳条湖事件」であるという点を確認しておく。

### 3.3 三木清『構想力の論理』における個性、発明志向

フランスの社会学者のガブリエル・タルドは『模倣の法則—社会学的研究』（1890）の著者として著名で、年下の同国の同時代人エミール・デュルケムと何度か論争したことで知られる。

『構想力の論理』Ⅱ章「制度」では、タルドが非常に肯定的に取り上げられる<sup>9)</sup>。

三木はこの『構想力の論理』でほとんど引用の形式はとらずに、他者の発言に多く言及するが、ここでもそういう形式で「諸義務は・・・その発端においてはすべて個人的な独創的な発明であった」（三木1967b 108-109）とタルドに依拠して述べる。

ここでいう諸義務の例として三木は挨拶（の仕方）を

挙げている。制度や慣習や規範として我々にとってのいわば「義務」となっている「挨拶」も、誰かが発明したものである。しかもこの誰かの創意で発明したものと、社会的習慣をつなぐものとして模倣がある。要するに模倣によって発明品である挨拶が、社会的習慣として定着し、制度と化す。「社会の本質は模倣である」(三木1967b 121)。その発明を模倣して流布して初めて、制度や慣習として定着すると、三木はタルドに依拠しながら述べる。タルド『模倣の法則』はデュルケムの社会実在論を批判する意図をもって記されたといわれるが、このタルド模倣論を肯定的に引くからには、個人に先だつてもののようなものとして存在する「社会的事実」を中心に考えるデュルケムの立場を、三木自身が暗に否定しているといえよう。つまり制度も個人の発明に端を発するという立場に、ここでの三木は基本的に立つ。

「今日我々の間でいわば自明のものとして通用してゐるものもその起源を遡ればすべて発明であつたのである」(三木1967b 121)。この文章は今でいう創発特性、要するに社会や集団のその構成員の総和には還元されえない力をほとんど認めない立場に与しているといえる。そしてタルドへの賛辞が続いたあとの次の文章は名指しはしないものの、デュルケムへの批判とも解せる。「(非人格的な集団とその根底にある個々の具体的な一人一人の個人との区別は) 或る制度もしくは社会的製作物において個人の発意に対し創造的役割を認めず、言語、宗教、等々は集団的製作物であるなどと云ふことが何等かの説明になるかのやうに信じてゐる人々によつて忘れられてゐることである」(三木1967b 122 [( ) 内、本稿筆者補記])。

またこれら発明はタルドにおいて天才によってなされるとされるが、天才、すなわち天賦の才能はすべての人が有している。「各個人はすべて或る天才であり、或る独創者である」(三木1967b 123)。

しかし三木はタルドへの批判も忘れない。発明的な人間の互いの模倣のし合いが、一定の定まった形へと収斂する理由をタルドは巧く説明し切れていないと三木は指摘する。タルドは「模倣線の錯綜した交叉」(三木1967b 127) という理由説明を行うが、それでは不十分であるとして、三木自身は模倣の条件・理由に、三木のキーワードである共感、パトスを求める(三木1967b 128)。そして民族もその共感、パトスの現れの一つであるとする。このあとデュルケム学派に対する肯定的な記述もいくつか続く。そしてデュルケム流の方法論的集合主義と、タルドの方法論的個人主義に近い立場<sup>10)</sup>との折衷を図る。つまりデュルケムの方法論的集合主義の、「もの」のよ

うな社会的事実そのものを一応認めつつ、個人の独立を重んじる形にまとめる。以下のように。「社会は個人と個人との相互作用の關係に歸し得るものでなく、超越的な主体の意味を有してゐる。制度が個人に対して規範的な、拘束的な性質を有すると云ふのも、そこから考えられ得ることである。しかしかのデュルケム派の思想の如きは個人のイニシアティブ、社会に対する個人の自律性乃至独立性を求め得ないといふ欠陥を含んでゐる。個人は単に社会に対して客体であるのではなく、また逆に個人は社会をも客体となし得る主体である。制度も意識的な技術である限りかような個人の発明に俟たなければならない。タルドの云ふ如く、慣習でさへその起源に遡れば個人の発明であると云ひ得るであらう」(三木1967b 183)。

この引用の第2文までは折衷的であるが、第3文の「しかし」以降はデュルケム学派とタルドの名前を挙げて、明らかにタルドに軍配を上げている。ただ先にも述べたタルドの模倣の原理が不十分で、よつて、この引用文のすぐあとで、模倣の根拠として「一般者であるところの社会」が想定されるべきとし、結局タルドにおける模倣の理由づけの弱さを埋め合わせるために個人を越えた社会も認めるという形でデュルケム学派との折り合いをつけた形になっている。

このような個性、発明を重視する視点は、『構想力の論理』のいまみたⅡ「制度」のあとの二つの章Ⅲ「技術」、Ⅳ「経験」でも貫かれる。

Ⅲ「技術」では形式論理と弁証法と構想力との関係が記される。ヘーゲルの弁証法は基本的に追考的弁証法であるのに対して、自分の構想力の論理はいわば創造的弁証法であると表明される(三木1967b 233)。形式論理学においては基本的に形たる形相は変化しない。それに対してヘーゲル弁証法は変化を想定したが過去から現在までの変化で、現在こそが最高段階であつて新たな形は作れない。またディルタイにいわせるとヘーゲル弁証法は元来生命の論理だつたということであるが(三木1967b 234)、生命が流動のままでは形を作れず弁証法にはならない。形を作るのが技術であり、人間も含めて自然も形を作るかぎり技術であると三木は述べる。さらに「技術の本質は発明である」(三木1967b 238) という形で、ここでも発明が重視され、発明自体が弁証法的性質をもつ(三木1967b 254) という。つまり技術は発明の成果であり、その発明の模倣をつうじて技術はくり返される(三木1967b 255) し、そのくり返しは記憶によるもので、記憶と創造力の弁証法的統一こそが構想力であるともいう(三木1967b 256)。このように発明と結びつくこと

で構想力が新しい形を作り出していくという意味で創造的弁証法になる。

三木のプランの上ではもっと章はあるはずであったが残された限りでの最後の章、IV「経験」において、経験とは、行動の形を作るものであるとする。構想力は新たな形を作り出す力であるので、よって経験も構想力の論理で捉えられるとする(三木1967b 269)。また経験は創造であり、発明であるとも記される(三木1967b 271)。その上でこの章ではカントの天才論にふれられるが、ここでもII章でのタルドの場合と同様すべての人が潜在的に天才であることが指摘される。「(カント『純粹理性批判』からの「構想力の独創性は、それが概念に一致する場合、天才と呼ばれる」という文章を引用したあと)構想力は本来天才的なものである。単に少数の天才にのみ属するといふものではない。それは元来人間における天才的な能力なのである」(三木1967b 375〔( )は本稿筆者補記])。

以上みてきたように、三木の『構想力の論理』は個人の独創性を基本に据えた議論となっている。それは三木の1920年の「個性について」以来、一貫した考え方であるともいえる<sup>11)</sup>。三木は独創性を天才に結びつけるが、三木の依拠するタルドもカントも天才はすべての人にある能力であるとの指摘をしていて、三木はそれを見逃さない。異質な他者との対話を通じて公共圏を成立させようとした、独仏留学からの帰国当初の三木の関心がそこでも貫かれているといえる。異質な他者それぞれの天賦の才、個性を見逃さず対話していこうという姿勢である。それは中井がミッテルの弁証法として三木から引き継いだものであるし、元来対話の論理を意味した弁証法の再構築として三木が構想力を位置づけることも、そのことから合点がいく。

しかし中井は三木の「構想力」をおそらくは意識して「構想力」の乗り越えを図る。それを次章でみていく。

## 4. 三木清の個性志向に対する中井正一の評価について

### 4.1. 中井正一「カントにおける中間者としての構想力の記録」における三木清への言及

中井正一には「カントにおける中間者としての構想力の記録」という1949年の論文がある。なお杉山(1983 139)はこの論文について次のように記す。「『カントにおける中間者としての構想力の記録』(一九四九)は、農村のなかでの文化活動のうちでかれがつかんだこの弁証法におけるメディウムとミッテルの関係の問題の解決

を示すとともに、それによる三木清の『構想力の論理』の批判を暗に模索するものなのである」と。この論文が中井における「弁証法におけるメディウムとミッテルの関係の問題の」一つの解決を示しているということ、そして、「それによる三木清の『構想力の論理』の批判を暗に模索するものなのである」という二点について、本稿の筆者は杉山に同意する<sup>12)</sup>。

ここで筆者は1949年の論文とはいって見たが、これはその序に相当する部分(「序」とはなっていないが「1」の前におかれた事実上「序」に相当する3段落分の文章)の第1段落で中井みずから「かつてたどった、カントの *Kritik* と *Doctrin* の記録に僅かに想いを加えることで、その責をはたさざるをえなくなったことについて、深くみずからを懺するものである」(中井1981a 305)とあるように、旧稿の書き換え、書き加えである。旧稿というのは「カントにおける *Kritik* と *Doctrin* の記録について」(1930)である。ここの「その責」というのはここに引用した箇所前の文章からみて、三木清記念の論文を求めたという初出雑誌(『哲学評論』(民友社)1949年3月号)側からの依頼を意味している。

この第1段落冒頭の文章は、三木のカント研究が個性から出発し、パトス、中間者を経て構想力へと発展したと指摘する(中井1981a 305)。

第2段落は弁証法と中間者の関係から書き出され、第2から第3段落にかけてメディウム、ミッテルという中井のキーワードがでてくるが、この段落の冒頭、次のようにやや呪文か謎かけのように奥歯にものが挟まった言い方をする。「弁証法における媒介の問題は、この「中間者」の問題の取り扱いによって決する。この中間者が、創造者としての「構想力」として捉えられることはさらに、弁証法との間を複雑化せしめるのである」(中井1981a 305〔傍点は本稿筆者補記])。

さきに本稿3.でみたように、三木自身は構想力は創造的な弁証法、他の弁証法は追考的な弁証法という分け方をする。あくまでも三木の立場からすると、構想力は弁証法の発展型なのである。ところが中井は「弁証法との間を複雑化せしめるのである」と濁した言い方をする。要するに、弁証法のようにありつつ弁証法になっていないと、言いたいように読み取れる。自分自身に影響を与えた、敬愛する先輩であるから「複雑化せしめる」という何をいいたいか分からないいい方をしたのであろう。「この中間者が、創造者としての「構想力」として捉えられる」というのは、要は中間者が神のように肥大化して「創造者」になってしまっているといっていると考えられる。田邊元の「西田先生の教えを仰ぐ」に対



する中井の賞賛の言葉を思い起こさせるかのようである<sup>13)</sup>。この引用部分にある、中間者は中井の用語上はメディアウムであってミッテルではない。なぜなら中間者であるのなら、(しかもそれが創造者としても捉えうるのであれば)、中間者の対立する両極も切れてはいなくて、連続的になってしまうからである(しかも本パラグラフ最後に引用する文章で中井は明確に「メディアウムとしての中間者」と述べている)。同じ次元のなかの相違は、質の相違ではなく量の相違となるからである。他方ミッテルは切れていなければならない。量的に連続せず、質的に異なるところ、つまり次元の異なる空間に赴く。切れているからこそ、次元の違うところに飛び込む、自己否定的媒介ともなるのである。よって上記引用文に続けて次のようにいう。「[「無媒介の媒介(ミッテル)」なる言葉、この逆説は、容易ならざる艱難を用意している](中井1981a 305-306 [( )は振り仮名])。ここの「艱難」とはそれに到達することの難しさと考えられる。というのも次に引く第3段落第1、2文で、あのカントでさえ、ついにミッテルに到達できなかったと中井はいうからである。「ここにしるすものは、この問題で、一七七三年より一七九〇年まで、カントがたどった一七年間の紆余曲折の記録である。そして、ついにメディアウムとしての中間者を脱することができず、ミッテルとしての媒介に到達できなかった苦悶の記録である」(中井1981a 306)。

三木はカントの構想力に依拠しながら中間者の着想を發展させたが、中間者はメディアウムであって、ミッテルには到達できない。それをここでは直接論じないが、カントが実際そうであったということで、暗に三木もその口であったということが強く示唆される。だからこの「序」の結びは次のように記される。「苦しかった三木君の思惟の跡を弔うにあたって、思惟のもつ、いたましいある種の厳肅さ、として、はなむけとする次第である」(中井1981a 306)。

そもそも旧稿「カントにおける Kritik と Doctrin の記録について」(『哲学研究』1930年)を「カントにおける中間者としての構想力の記録」とわざわざ替えて改稿し、この新稿のタイトルは「中間者」「構想力」という三木のキーワードを鏤めている。そのことからこの論文はカントにかこつけた三木清論であることは明らかであるし、そこで「ついにメディアウムとしての中間者を脱することができず、ミッテルの媒介に到達できなかった(カントの)苦悶の記録」(中井1981a 306 [( )は本稿筆者補記])と記すことから、この論文は三木がミッテルに至れなかったと批判していると考えerことは妥当であろう。

以上の点から、この引用文最後の「思惟のもつ、いたましいある種の厳肅さ」というのは、要するに三木の未完のライフワーク、『構想力の論理』は失敗に帰しているという中井の見立てが、「いたましい」「厳肅さ」という言葉に示されているといえよう。

#### 4.2. 中井正一による「構想力」の「企画力」への読み替え

中井正一の「言語」(1927, 1928)や「発言形態と聴取形態ならびにその芸術的展望」(1929)ではヘーゲルの内なる言葉の弁証法と、ソクラテスの外なる言葉の弁証法との対比が示される(中井1981a 255-256)。

他方『中井正一全集』第2巻所収の中井の講義録「転換期の美学」(1932年頃)では、「弁証法が内面的と外面的の二つの方向にその姿を現わす」(中井1965 300)という形で、この「言語」等のヘーゲルの内なる言葉の弁証法とソクラテスの外なる言葉の弁証法の対比を受け取る形となっている。さらに前者は記憶・記録に関する弁証法であるのに対して、後者は想像・企画に類する弁証法であるとされる(中井1965 299)。この中井の講義録「転換期の美学」(1932年頃)では、過去を向き飛躍を不安がるハムレットと未来に飛躍するドン・キホーテが対比的に描かれる(中井1965 298-299)。ここで中井はリレーのレースを喩えとしてもちだす。バトンを受ける者がバトンを渡す者となる。前者すなわち帰着者がハムレット型の魂であり、後者すなわち出発者がドン・キホーテ型の魂である(中井1965 299)という。また次のようにもいう。「ハムレット型は、ある一点に必然的にもたらされる自分の状態に対して、ただ不安なる反省を試みる魂である。しかるに第二のドン・キホーテ型の魂は、ある地点よりただちにその位置の距離と矛盾とを把握して、ただちに次の立場に向かって飛躍しようとするところの一つの魂である」(中井1965 298)。これらハムレット型とドン・キホーテ型の対比を受けて次のように中井は語る。

「個人的意識の内面においては、一つは記憶の中に宿り、一つは想像の中に宿るのである。歴史的側面において、一つは歴史的記録の中にかくれ、一つは歴史的企画の中に現れていくのである。いわば弁証法が内面的と外面的の二つの方向にその姿を現わすのである」(中井1965 299)。

まず、ここの文章を過去志向、未来志向の軸と、個人的意識の内面と歴史的側面の軸とのマトリックスに表示すると以下の表2のようになる。

講義録ということもあって本稿4.2第2パラグラフの

引用文の弁証法の内面的、外面的がどこに相当するのか明確にはいわれていない。x軸方向にハムレット型が内面的弁証法、ドン・キホーテ型が外面的弁証法になると考えることもできようが、一方でさきにみたテキストで「個人的意識の内面」と書いてあるので、y軸方向に個人的意識を内面的弁証法、歴史的側面を外面的弁証法とも捉えることもできる。いずれであれ、このマトリックスの第2象限が内面的弁証法の典型であるのに対して、第4象限は外面的弁証法の極みであるといえよう。先の引用部分に続けて、次のようにもいわれる。「この弁証法に、われわれの見るということ、あるいは聞くということが深い関係をもってこようとする」(中井 1965 300)。

この表2における記憶・記録と想像・企画の対比は、想像力=構想力でもあるので、先に3.でもみた、三木の構想力の論理を意識した文章であると想定される。この

かぎりでは中井は三木を意識していると考えられる<sup>14)</sup>。

またこの「転換期の美学」の講義のあった頃と推定される1932年の論文「思想的危機における芸術ならびにその動向」(1932)では以下の図1が記される<sup>15)</sup>。

「転換期の美学」(表2)では「個人的意識の内面」と「歴史的側面」の対比で軸が構成されていたのに対して、この(図1)では「個人主義機構」と「集団主義機構」が対比される。表2の「個人的意識の内面」と図1の「個人主義機構」は近い。他方、表2の「歴史的側面」と図1の「集団主義機構」の方は言葉の表面上の語感はやや遠い。しかし、歴史を作るものとしての集団ということであろうし、さらに歴史というと基本的に過去向きの語感で、他方、図1には記録と企画双方があるので、表2の「歴史的側面」が図1の方では「集団主義機構」に置き換えられたのであろう。また表2の四つの象限の記憶、想像、記録、企画の機能が図1でもそれぞれ機能として

表 2

	ハムレット型 (= 過去志向)	ドン・キホーテ型 (= 未来志向)
個人的意識の内面	記憶	想像
歴史的側面	記録	企画

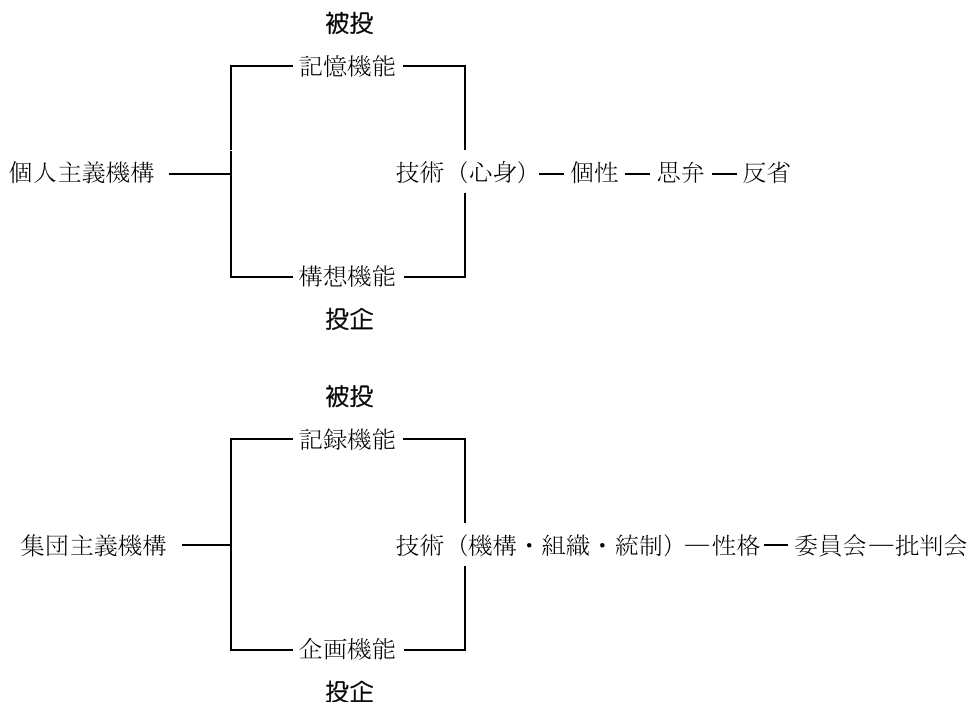


図 1

想像以外は残っていて、想像は構想機能に置き換わっている。

ここには「弁証法」の文言はないが、表2が弁証法の二つの形の議論の一環での文章を本稿の筆者が表に表したものであったことを踏まえると、個人主義のところでは被投が記憶機能で投企が構想機能であるのは、本稿3.でも確認した、三木が自分の構想力の論理を未来志向の弁証法で、それまでの追考的弁証法を乗り越えているといった発言と照応するといえる。しかし図1の二段目は、一段目を集団化した図であるが、一段落目の「構想機能」が二段落目では「企画機能」に名前を変えている。そして「個性」に対しては「性格」が、また「思弁」に対しては「委員会」が、それぞれ置き換わっている。先行研究の山田(2018)が全面的に依拠し、本稿もあとで詳述する中井の「三木君と個性」のタイトルからも、そして『哲学研究』の三木のデビュー論考が「個性について」であったことから、「個性」が「性格」に置き換えられ、それにあわせて「思弁」も「委員会」に置き換えられたことは、象徴的である。つまり三木のキーワード「構想力」「個性」を乗り越えた形で、二段落目の「企画力」そして中井のその後のキーワードである「委員会」が、それぞれ記されるのである。

つまり個性志向はヘーゲルのような自問自答の自分の意識の中に閉ざされた弁証法になってしまう<sup>16)</sup>。他方ソクラテスの弁証法はまさに対話の論理であって、外に開かれている。基本的に外に開かれ集団で物事を把握していくことがここでは中井にとって是とされ、その点でここでの中井は三木の個性志向を乗り越える必要性を感じているといえる。

三木清の『構想力の論理』はまだ書かれてはいず、構想力の論理自体、この時期まだ着想段階ないしは初発段階であったにせよ、三木に近い知的圏内にいた中井が構想力の論理を見据え、さらにその乗り越えを図り、しかもその乗り越えた先に自分の未来の代表作「委員会の論理」(1936)を見透していたといえよう<sup>17)</sup>。

## 5. 「三木君と個性」について

山田(2018)でも大きく取り上げられ長く引用された中井の「三木君と個性」であるが、本稿でも1章を割いて分析したい。これは『回想の三木清』(1948)に所収の論攷である。山田(2018)は「彼はこの才能なきものどもの伏線にかかったのである」(中井1981a 340)というこの文章中の中井の言葉を自身の論文全体の鍵となる言葉として扱うし、筆者もこのフレーズは重要であると

思い、別途詳細に分析したいが、本稿ではこの点は扱わない。

三木が洋行から帰り、深田康算宅に谷川徹三を連れて帰朝報告に来た際の思い出をまず中井は語る。友人を批評しているときに三木が「あれは才負けしてますね」(中井1981a 340)といった。中井は「この言葉は、今も、妙に私の頭に残っているのである。・・・私には、この才能の士が、才のもつ危険に向って、みずから挑んでいるような、何か火花の散る思いがしたのである」(中井1981a 340)と述べる。

京大に残ろうとしつつ先ほどの「才能なきものどもの伏線にかかっ」て、「新たな思想圏」(中井1981a 341)に踏み入れる。要するに後藤(2006)で述べたような公共圏、民間アカデミズム的な世界を志向する。そういう三木のような「才のもつ危険に向って、みずから挑んでいる」者は、才能が有り余りあれこれ手を出す。これを、世間では「一つのことを静かに研究していればみずから得られる地位もあるのに、がたがたするもんだから失敗したり、人にかつがれたりするんだ」(中井1981a 341)とし、世間では三木のことを「才負けである」(中井1981a 341)と評する向きもある。

しかしそのような批判的見方を中井は退ける。個人主義的な考え方として否定する。「はたしてそうであろうか。個人・人格の完成に含まれている考え方の中には、個人主義的な成功主義の慣性的な考えかたが加味されている。資本主義が集団的段階に到達している危機的現段階で、人間構成の新たな適応が要求されている時にあたって、個性の考えかたがみずから意味をかせ、「モルフエ」として、成長しつつあるかのごとくである」(中井1981a 341)<sup>18)</sup>。

ここで示される三木の姿は『構想力の論理』で個性や天才を重視し、デュルケム的な方法論的集団主義をほぼ否定的に捉える、本稿3.でみた三木とは違うし、ミッテルをめざしつつもメディアムにとどまったカントに引きつけて中井によって描かれる本稿4.1の三木とも違うし、構想力という個人主義的なものに留まり、それが集団的あるいは「委員会」的なものに発展しない本稿4.2でみた三木とも照合しない点に、留意しておきたい。

続けて次のように述べる。「それは、個としてのまとまった全体の要素ではなくなりつつある。弁証法的概念のもつ課題もまた、そこにあるのである。すでに個なるものは、大なる発展と分裂において、過程の中に捉えられ、みずからをととのえつつある」(中井1981a 341)。

個が分裂する弁証法的課題ということで、自己否定的媒介であるミッテルの弁証法との近さが示される。次の

段落では現代演劇の登場人物に引きつけてそういう自己の矛盾に引き裂かれ、自分の本来の思う方向と違う方向に重心がずれていくことが示される。「劇に出てくる人物も、善玉、悪玉ではなくして、弁証法的契機として、引かれている綱引きの真中にくくられている標し<sup>18</sup>のリボンのように、力と力の二つの闘いの中に動いている力点である。モメントである。それは歴史の中の力学的な位置であり、歴史をして正しく流れるための容易ならざる部署である。かかる部署に身を置くにあたっては、これまでの個性、または人格は、ある場合は、その部署の意味で拡大され、また過重な任務を力点的に負わされることもある」(中井1981a 341-342)。このように記した上で、次のように続ける。

「それが、ずれて、その一部を偏向しながらでも負担される場合もある。いよいよ人がいなければ不適合な部署に、みずからの役割を適合させなければならなくなる場合も生ずる」(中井1981a 342)。

この文章は三木と中井を、少なくともその後半生の歩みについては、非常に近いものとして中井が捉えていることを示しているように思われてならない。三木は京都学派左派の代表格という左寄りのポジションであったにもかかわらず、昭和研究会で中心的役割を果たし、結果的に軍国主義に向かう時代の首相ブレインとして働いたことは<sup>19</sup>、「その一部を偏向しながらでも負担される場合」に相当しようし、「いよいよ人がいなければ不適合な部署に、みずからの役割を適合させなければならなくなる場合」にも相当しよう。そして中井はといえば元々はモダニズム的な美学同人誌のリーダーであっただけで、リベラルでこそあれさほど左派でないのに、京大瀧川事件が起こって学問の自由を守るため、文学部大学院自治会のリーダーになり、そこで得たマルクス主義者の友人らと『美・批評』第二次、『世界文化』へと美学雑誌『美・批評』を政治的なものへと発展させ、人民戦線の疑いにて治安維持法違反で1937年に逮捕される。要するに、京大哲学科関係者の左の代表格であった三木がファシズムへと向かう政権のブレイン集団幹部という右寄りのポジションに、中道左派の美学雑誌のリーダーであった中井が左の人民戦線系と目される雑誌のリーダーというより左寄りのポジションに、と、左右の揺れの動きはちょうど真逆であるが、三木、中井ともに「いよいよ人がいなければ不適合な部署に、みずからの役割を適合させ」ることのできた人物であるといえよう。とくにこの論稿の入稿日が発行日と近いのか遠いのか次第で変わるが、1948年1月という発行日からすると、中井が国立国会図書館に務める可能性が濃厚になっていた時期の

入稿の可能性もあり、国立国会図書館副館長という立場ももしかしたら、今度は左の人民戦線から国家の要職という右のポジションへと動くという形で、「いよいよ人がいなければ不適合な部署に、みずからの役割を適合させ」る場であると中井は捉えていたのかも知れない。

そのあとの評言も散文詩かと思うような表現が続き長く引用したいが、紙幅も限られてくるので、ミッテルを想起させるものを短く挙げておく。「三木君が・・・謬りあらば罰をと、歴史の中に身を放擲して歩んだ道は悲壮である」(中井1981a 342)。「この分裂を身をもって描いてみせるものがなくしては、個は決して全体の個ではなく、弁証法の契機としての個であることは示しえなかったのである」(中井1981a 343)。

そして西田や田辺の哲学を三木が越えているという。「それは「あせった」のでもなく「才負け」したのでもない。新たな個の実を、西田哲学でも田辺哲学でも描いてみせなかった、自分が真に歯がみし、生きることが死ぬことである、真の「形」においてあらわしたのである」(中井1981a 343)。

この文章は故人への餞とはいえ最大級の賛辞であるが、ミッテルという言葉そのものはでてこない。他方、中井が1951年『哲学研究』に寄稿した「回顧十年」に割と似た文章があるので、それをみてみよう。そこではミッテルとして明確に位置づけられている。予め注釈を申し上げるが、田邊元の「西田先生の教えを仰ぐ」(1930)、「種の論理の意味を明かにす」(1937)等の『哲学研究』誌上での一連の西田批判に、西田はほぼ沈黙で応じ、他の弟子筋の者たちも含めて『哲学研究』誌上で答えがだされてこなかったことを、以下の引用文で中井は「空白」といつている。

「そして、その空白は、媒介なる概念が **Medium** か **Vermitteln** の **Mittel** かを問うているところの、巨大なる疑問符をものがたっている。そして、もし、一二年の田邊博士のあの論文(「種の論理の意味を明かにす」を指す)の主意が、さらに生きていたとしたならば、行為して無に躍入した三木清と戸坂潤の死は、田邊博士のいわゆる「否定の深淵を越えさせる何らかの媒介」(五七頁)として、この空白に行為をもって答えている数行である、ともいえよう」(中井1981a 355 [最初の( )は本稿筆者補記、あとの( )は中井])。

中井の趣旨ではメディウムの典型が西田哲学で、ミッテルをめざしたのが田邊である<sup>20</sup>。その田邊のいう、ミッテルとして西田哲学は展開できるのかという問いへの西田の沈黙に対して、西田の弟子の三木と戸坂、とくに三木は周囲からも西田から愛された弟子と目されているだ

けに、その愛弟子が身をもって答えを示したというのであるから、これは紛れもなくミッテルの媒介であるといえる。したがって、またさきの「三木君と個性」での類似の表現、「生きることが死ぬことである」(本稿3パラグラフ前に引用)等もミッテルとして位置づけられる。

「三木君と個性」に戻るが、中井は「三木君と個性」の先の引用文に続けて次のように述べる。

「流星がすべっていくように、光芒のごとく描いてみせた三木の個性の問題は、私にとって追いつくべき、捉えなくてはならない、目をつむることによって光を増す一つの課題となった」(中井1981a 343)。

「世間では「一つのことを静かに研究していればみずから得られる地位もあるのに」(中井1981a 341)という形で自分の著書にのみ才能と個性を結実させるのではなく、むしろ自己否定的媒介をし、自分ではなく他者、集団を育てていくことに自分の生き甲斐を求める姿を、中井はここにみている。おそらく1935-37年の『世界文化』や喫茶店に置かれる読者の投稿のみで構成されることをめざした隔週刊新聞『土曜日』を刊行した京都の人民戦線の反ファシズムの運動、1945-48年の尾道での農村の青年の啓蒙に向けた文化運動、そしてこの時点での近未来である1948-52の国立国会図書館副館長としての職務、そういった中井の諸活動が、三木の活動と二重写しになっていたに違いない。

鶴見俊輔の中井評でいう「思想の発酵母胎」(鶴見1959)としての中井自身の姿がみずからみえていたはずである。そしてそれと三木の姿も重なってみえていたように思われる。

## 6. まとめと考察、今後の課題

本稿2.では、中井は三木の間接者=メディウムとその乗り越えとしてのミッテルの双方を、三木の『パスカルにおける人間の研究』にみている点を確認した。3.では三木の晩年の代表作『構想力の論理』が個性志向、天才志向で貫かれている点を確認し、4.1では中井の戦後のカント論「カントにおける中間者としての構想力の記録」の「序」に相当する部分で、三木の「構想力」がメディウムにとどまると暗示されている点を解説し、4.2では中井の1930年代前半の論攷で三木「構想力」が集団性を欠くという点で自己に閉じられているので、それを批判的に乗り越えようとする意志のあることを論じた。他方5.では「三木君と個性」では三木を集団主義的、ミッテル的に中井が解していることを示した。要するに2.と5.の三木はミッテル的な部分の強い三木、特に5.は集団

志向的な三木、他方3.と4.は個性志向、個人主義的な三木である。

そこに大きな矛盾というか隔たりがある。しかし三木のライフワーク『構想力の論理』への中井の評価を本稿4.1で「カントにおける中間者としての構想力の記録」に即してみてもみたように、ライフワークの書き手としての三木はメディウム的で乗り越えの対象ではあるものの、「三木君と個性」の方の実践者三木はその書き手三木を自ら乗り越え、ミッテル的であると理解すれば、矛盾はほぼなくなる。

要するに「三木君と個性」での三木の「個性」とは何かと考えると、外向きの弁証法で対話のみを重視することで、本を書こうとしなかったソクラテスの姿に三木の本領(本当の三木の「個性」)を中井は認め、それと中井自身の姿とを中井は重ね合わせているといえよう。ちなみに「委員会の論理」(1936年)の第1節で中井は次のようにギリシア時代の書かれた言葉への軽蔑を評していた。「『書く言葉』は、ギリシャではバルバロイの仕事であり、ポイニケーの符徴であって、軽蔑の対象である。プラトンは『パイドロス』(二七六A)(二七D)『プロタゴラス』(三二九A)などで、「書かれたる言葉」への激しい対立を示している」(中井1981a 47)。またこの箇所ではソクラテスの名前はでてこず、弟子のプラトンがソクラテスの立場を代弁している形をとるが、プラトンはソクラテスの言葉を書き写し、そして自分の言葉も書いたことは、中井の「言語」(1927, 28年)で次のように記される。「ソクラテスの「言葉」を「書き写した」プラトンの仕事は、言葉をソクラテスに借りたる、みずからに問いみずからに答えた自己反芻の苦い記録ではあるまいか」(中井1981a 221)。

ソクラテス学派の方に少し話がそれたが、いわば「三木君と個性」での三木の「個性」とは、「個性について」で京都哲学会にデビューした狭い意味での三木の個性から一皮剥けた、三木の「個性」のことであり、それをソクラテス的な意味での実践者三木にみいだしているともいえよう。

三木の『パスカルにおける人間の研究』のいい方に即していえば、書き手三木はいわば精神の秩序にいて、他方実践者三木は慈悲の秩序にいても考えられる。その二つは関連はするが、ある意味、面と空間のように次元が異なる。次元が異なる世界だから、書き手三木への評価と実践者三木への評価は異なってもいいし、書き手としてはメディウムの壁を突き抜けられなくても、実践者としてなら突き抜けたミッテルの実践者であってもよいことになる。

なお、「個性について」に集団主義的な発想の眼がないかのような記述を先に本稿3.1で筆者はしてきたが、「個性について」にもそういう媒介者、「思想の発酵母胎」(鶴見1959)に役立つための個性志向への兆しも、じつは少しではいた。

「自分を知ることはやがて他人を知ることである。私達は私達の魂がみずから達した高さに応じて、私達の周囲に次第に多くの個性を発見していく。……自己の個性の理解に到達し得た人は最も平凡な人間の間においてさえそれぞれの個性を発見することができるのである」(三木1954 146-147)。

とはいえ、ここには「みずから達した高さに応じて」という能力の高低の発想がある。しかしながら、たぶん生前未公表の遺作『親鸞』ではそうはなっていないと想定される。後藤宏行は『転向と伝統思想』(1977)のなかで「わずか二百余枚のこの遺稿のなかで、三木は、従来の「自分で考え、発言し、創造していく」人間から、「他人の言葉を耳で聞き、信従し、行為する」人間への、転換と再生の方向軸をさぐるとしたのではなからうか」(後藤1977 147〔傍点、本稿筆者〕)と述べている。いわば『パスカルにおける人間の研究』でいう違う次元への飛躍、コンバージョンとして、この後藤宏行のいう「転換と再生の方向軸」を捉えることもできよう。「自分で考え、発言し、創造していく」人間から、「他人の言葉を耳で聞き、信従し、行為する」人間へ」というのは、いわば個性志向から「思想の発酵母胎」としての集団志向の立場への転換と捉えうる。

中井は両親の影響で浄土真宗の熱心な信徒であったし、かつて人間学的な三木のマルクス理解を講座派的な立場から厳しく糾弾し他方中井とは三高繋がりて親しい服部之総にも、『親鸞ノート』(1948)があるし、田邊『懺悔道としての哲学』(1948)でも親鸞が主題となっているが、三木も含め彼らの親鸞観の比較とメディウム、ミッテル問題との関係はまたのちほどの課題としたい。

## 注

1) 一部修正というのは後藤(2016)のメディウムに「媒介」が入っているためである。今回メディウムから「媒介」を省いた。それについては後藤(2017b)でも文章上で訂正したが、ここでは表に修正を施した形で入れた。「媒介」は「媒介すること」に較べれば静的であるので、相対的には「媒介すること」よりもメディウムであるが、基本的に「媒体」がメディウムであるのに較べれば「媒介」も「媒介する

こと」もミッテルであると捉えうるからである。

- 2) 後藤(2017b)の注を一部繰り返すが、第六高等学校での中井の同一の講義を三年間も聴き続けた詩人・美術評論家の栗田勇は、「西田哲学の場合はメディウムに過ぎない。実体的なもの」と中井は評していたと語り、「田辺元はあるところまでメディウムではなくてミッテルとしての弁証法を追求して、そこで挫折したというのです」(鶴見ほか1963 81)と証言している。西田ではなく田邊寄りの中井の立ち位置と彼のミッテル志向は相関する。また西谷啓治(のちの文化功労者)が左右田喜一郎、高橋里見、田邊、山内得立等の西田批判の論考をレビューするなかで、山内得立(のちに西谷ら京都学派四天王の公職追放後、京大哲学科教授になり文化功労者にも選ばれる)が、西田哲学をメディウムとし、メディウムからミッテルが必要であると述べていることも、西田哲学をメディウムと理解することの大きな傍証となる。「西田哲学に対する山内得立博士の批判は同博士の著『体系と展相』所収の論文「哲学の出発」に現れている」(西谷1998 170〔初出は1936年『思想』])と西谷は明確に述べる。しかし本稿の筆者が『体系と展相』所収の論文「哲学の出発」(初出年は1933年)を読んでも、西田の直弟子の一人であるだけに、西田の「に」の字もでてこない。ただし「事物は於いてある場所として」(山内1937 11)とか「無の世界」(山内1937 14)とかさらに「場所的弁証法」(山内1937 14)とか、西田哲学のキーワードを鏤めながら、書いているので、西田批判と読む人が読めば分かるのであろう。ただ西谷はこの本の出版年に明大を卒業した従弟の西谷能雄(のちの未来社創業社長)をこの本の版元の弘文堂に紹介し就職させているので、著者山内の意図を単なる京大哲学科の同窓生という以上によく聞ける立場にあった。なお、この山内の論文では、メディウムからミッテルをとすることはしっかり述べられている。「ヘーゲルにとって Medium は Mittel とならねばならなかつた。媒体を媒介に変換することは単に語の巧妙な変貌であるのではなく思想の根本的な転換でなければならない」(山内1937 11)。したがって、これが中井の着想のルーツの少なくとも一つであるということは、明確に理解できる。
- 3) この辺りの詳細は本稿注2)参照のこと。
- 4) 和辻と三木は兵庫県出身、旧制一高出身で出身大学は違うが出身県も高校も先輩後輩の関係。和辻と林双方の義兄高瀬彌一(藤嶺中学教諭、貿易商を経て

藤沢町議)も一高の卒業生、林も一高中退で彼らすべてが一高つながりで、しかも東大国文科卒の高瀬以外京大哲学科つながり(三木は卒業生、林は選科の修了生、和辻は教授)でもある。戸坂潤のいうには一高から京大哲学科に進む者は稀で三木がそのパイオニア的存在であったということであるから(戸坂自身一高、京大哲学科)、彼らはかなり強固な同窓意識を感じていたはずである。また和辻は結婚後しばらくして一時期高瀬宅の離れに住んでいたこともあるので、通常のケースよりも自分の妻の妹のことを知る機会も多かった可能性もある。

- 5) 谷川も三木、林と同様、一高、京大である。また和辻は京大に来る前は法大教授、三木も一度目に逮捕される前は法大教授、林も法大講師を務め、そして谷川は法大教授でのちに法大総長で、和辻、谷川、林、三木の四人は一高、京大のみならず、法大繋がりでもある。
- 6) 三木(1980)は中間者と同義の言葉として「両重性」も使う。正確には両重性があるから中間者として人間は存在する。三木のいうに、パスカルの悲惨と偉大の両重性は定立と反定立であり、それは弁証法になっているという。「悲惨と偉大はあたかも定立と反定立の関係に立っている」(三木1980 173)。例えば三木は人間の悲惨の例として情欲をあげる。情欲にとらわれた人間はみずからを悲惨と考える。しかしみずからを禽獣に等しいと認識するとき他人からの尊敬や信用を得られないことを嘆くことから、人間を高貴の視点から眺めることになる、という。よってこのような定立と反定立の狭間にある、両重的な「人間の存在の構造はそれの一つの解釈として必ず他の反対の解釈を促がせしめるところの性質をもつ」(三木 1980 174)とされる。続けて「生の正しき解釈は、パスカルの語を用いれば、「正から反への連続的な転換」(……仏語部分中略……)を行うべきである。ディアレクティックは生を解釈する方法である」(三木 1980 174)と記され、弁証法として、この偉大と悲惨の中間者としての両重性への認識も記される。しかしこれは弁証法といっても「あれかーこれか」あるいは「あれもーこれも」で迷っている状態で、結局は総合(ジンテーゼ)なり「あれかーこれか」での決断に至らない。よって中間を意味するメディアムの弁証法に中井はこれを捉えたと後藤(2008)では考えた。三木自身は次のように表現する。「人間の存在の矛盾を総合する見方はエスプリの秩序にある生には与えられておら

ず、これを獲得するためには生は慈悲の秩序にまで昇ることが必要である。生の宗教的解釈に到って初めてディアレクティックは完成するのである」(三木 1980 182)。精神の秩序とは別の秩序への飛躍、次元の相違する段階への乗り越えあって初めて、本当の意味での弁証法となると三木はいう。この段階の弁証法を中井は、ミッテルと捉えたと後藤(2008)では考えた。あるいはもう少し後ろの方でも三木は繰り返す。「哲学は生の存在の仕方を悲惨と偉大との両重性において発見した。しかるにこの両重性はひとつは悲惨としてひとつは偉大として矛盾である。エスプリはこの矛盾を解決し得る方法をもたない」(三木 1980 214)。要するにエスプリ=精神の秩序での総合不可能性を指摘し、次のようにいう。「矛盾の理由を見る高次のエスプリ—それは心情そのものでなくて何であろう—がエスプリを超越することは、あたかもエスプリが肉体的なる感官を超越するが如くである」(三木 1980 215)。そこで次のように次元の相違に言及する。「矛盾はひとつの秩序のものであり、その総合は他の秩序のものである」(三木 1980 216)。つまり弁証法の完成は、次元・秩序をいまのものから新たなものへのりこえて初めて可能となる。よって、これは中井流にはミッテルといえる。なお、いわば通常精神の秩序の住人である人間は「偉大」として慈悲の秩序を想定し、「悲惨」として物質の秩序を想定しようと後藤(2008)は理解しているが、それは上述の三木自身の説明からは逸脱した穿った読み方ともいえよう。

- 7) 中村は西田哲学の乗り越えに『構想力の論理』が重要であるにもかかわらず、「私のリズムとは合わない」(中村 2001 289)ので「ピントが合わせられなかった」(中村 2001 288)と述べる。さらに中村は、三木の背後にいる西田幾多郎の姿がよく分からなかったので、三木『構想力の論理』が読みづらかったという。そこで『西田幾多郎』という著書を岩波書店で書くことになる。
- 8) 『理想』の現物でも確認したが、筑波大学附属図書館にある版では少なくとも、全集の記述の方が正しい。
- 9) タルドの発明と模倣で説明する社会学がシュンペーターの経済理論の先駆であったという説もある(中倉(2008)及び小林(2014))が、シュンペーターは三木の年下の義兄の東畑精一がボン大学で学んだ恩師である。東畑は三木に先立って昭和研究会に参加し、獄死した三木の身柄引受人にもなり、『三木

清全集』の編集者の一人ともなった。

- 10) 「方法論的個人主義」のタームそのものは社会学史のテキストではウェーバーに帰せられるので、「近い立場」と本稿本文では記したが、群衆・公衆論をあわせて考えると方法論的集合主義と方法論的個人主義双方に距離をおいていたという方が正確かもしれない。ただし注9)で名前を挙げたシュンペーターは経済学領域での方法論的個人主義の代表格ではある。
- 11) 廣松渉(1989)は昭和研究会時代の三木の書いた文書『新日本の思想原理』(1939)等の東亜共同体の思想原理を分析する。そこで次のように記す。「銘記しておきたいのは、彼が「全体の優位性」を承認しつつも、但し、個々人であれ、民族であれ、その個性を喪失せしめるがごとき方式での全体主義には反対していることである」(廣松1989 144)。この廣松の指摘から推すと、『構想力の論理』に示される三木の個性信仰は、ある意味、ファシズム時代の全体主義への抵抗シュルターの側面もあったであろうし、そうでありつつタルドのライバル、デュルケムにも配慮した書き方というのは「全体の優位性」も全否定できない政治状況であったことの反映としても捉えられる。本稿は現代の視点から中井による三木の個性志向への批判を肯定的に書いてはいるが、時局的な問題を考慮すると、別の局面も考える必要性はあると感じていて、この問題は今後の課題である。なお上記の引用文のように記しつつ、廣松は『新日本の思想原理』(1939)等が対立する二つのものの止揚を「形成力」等と表しているものの、それで具体的に何ができてくるかの理論体系のまとまった具体像は記されていないと三木を批判し、その問題はライフワークの『構想力の論理』にも通底する問題であると手厳しく記している(廣松1989 153-154)。
- 12) なお、メデイウム、ミッテル問題に引き寄せて、中井が三木『構想力の論理』をここで批判しているという杉山の論点には賛意を表すが、この中井のカント論文に即して、メデイウム、ミッテル問題に杉山が与えた解釈にはまったく賛同しない。この杉山の論文は稲葉(1987)のメデイウムからミッテルをと中井は一貫して唱えたという立場に対して、「メデイウムの支えあるミッテル」というのが晩年の中井の主張であると唱え、その読み方に合わせてこの1949年のカント論を読み込んでいこうとする。とくに「農村の思想」(1951)の「(農村では)思想とし

ての体系的基盤が欠けているのである。すなわち「思想」ということにふさわしい地盤、媒介(メデイウム)が、魂の中に未だ成立していないのである」(中井1981b 151[最初の( )は本稿筆者補記。次の( )は中井記])という記述や、「自分が自分の矛盾を自覚するためには、自分が自分をひとまず押しやって、それを眺めるところの批判が必要なのである。その批判をするためには、魂の一つの広間が必要なのである。この広間のことを、人々は「思想」というのである」(中井1981b 152)という記述をその根拠とする。稲葉、杉山の事実上の師弟論争に対して、双方に学んだ筆者も後藤(2005)等では基本的に杉山の捉え方の方に分があると考えたが、そうであっても晩年に至ってもケースバイケースであり、中井のテキストとその置かれた状況次第であるとも筆者は考え(要はある時代になると一斉に考えが変わるというものではないとみなし)、その後、筆者自身のスタンスが色々揺れつつ現在に至っている。しかしこの中井のカント論にはミッテルへの躊躇いも表明されてはいるとも読めるものの、基本的にミッテルに至れなかったカントの記録というのが、テキストからの素直な読み方であるし、本稿本文の本注のついた箇所(4)の4パラグラフ後の終盤に引用した文で、中井自身がそのことに言及してさえいる。今回、中井の三木についての論述をいわば様々な年代を通してみてきた場合にも、その方が整合的であると考えている。というのも、三木における西田哲学の影響、そして中井における田邊をつうじての西田哲学との対決、それぞれは、計り知れず大きく、また中井の場合メデイウムの典型としては西田哲学を想定していて、そうであれば、「メデイウムに支えられたミッテルを」という前にまだ、「メデイウムからミッテルへ」という方が基本的には先決とも考えられるからである。ただし今回、本稿では1949年のカント論は「序」に相当する部分のみを分析し、他の部分や異稿ともいえる他の二つのカント論との違いにも、言及できていない。そちらの面からみると、もしかしたら杉山の見解を裏づける考えに至るかもしれないので、いま本注でのべた点もあわせて、別稿でその点も考究し直したいが、今回は中井への三木への言及を時代問わずに追ってみたかぎりで「眺め」ということになる。

- 13) 中井が京都哲学会『哲学研究』に出した「回顧十年」という思い出を綴った論攷に、「西田先生の教えを仰ぐ」を読んだときの中井の衝撃が描かれている。



中井が賛意を示しながら引く田邊の文章に次のようなものがある。「もとより歴史的なるものは超歴史的なるものの上に成立し、相対的なるものは絶対的なるものを予想する。しかし契機として現れる絶対的なるものは単に微分的にとどまり、その全体はこれを媒介にして求められたるに過ぎない。歴史的なるものの基底として予想せらるる超歴史的なるものは、ただ歴史的なるものの方に含まれる微分であって、後者を通じて無限に求められるイデーにはかならない」(中井1981a 352; 田邊1998 74)。この引用文に引きつけて、三木の「創造者」を説明すると、要するに創造者や絶対者を微分的、つまり漸近線的に近づきたい目標、極限として哲学が描くのはよい、しかしその立場を出発点としてだしてしまうのは哲学の死に他ならないということになる。

- 14) ただし三木の構想力の構想そのものは内田 (2009) のいうには1924年であるが、「構想力」の言葉そのものは1933年4月が初出であるゆえ、三木を意識していると明確にいうには、この講義の行われたのが1932年頃という、「頃」に33年が含まれる必要があるかも知れない。
- 15) この図の「被投」「投企」はハイデッガー由来の言葉である。また中井の図にはドイツ語の *Geworfen* と *Entwurf* がでていますが、本稿の図には訳語の方を充てた(前者については「芸術の人間学的考察」(中井 1965 7)で「*geworfen* 被投」と併記している)。轟 (2017) は「被投」については次のように説明する。「現存在は気分のうちで、自分がすでにそのようであること、つまりある固有の状況のうちに置かれていることを、おのれの意のままにならない事態として見出すだけである。／ハイデッガーはこのことを、現存在がおのれの「現」へと投げ入れられていると表現し、現存在の「おのれの現への被投性 (*Geworfenheit*)」と呼んでいる」(轟 2017 177 [／はオリジナルでの段落替え])。また轟は「投企」に「企投」という訳語を充てるが次のように記す。「企投の原語“*Entwurf*”は「起草する」とか「下図を描く」という意味の動詞“*Entwerfen*”から派生した名詞で、日常的用法としては「草稿」や「下図」を意味する。しかし“*Entwerfen*”には「投げる」を意味する動詞“*werfen*”が含まれているから、ここには「投げる」という含みもある」(轟 2017 196-197)。なお、この図については拙稿後藤 (2017a 9) で図そのものは提示しないが、説明を加え、そこでは「個人主義機構」の方に「構想機能」があ

り、中井が意識したか否かは措いて三木の「構想力」との比較が可能である」と記している。他方、本稿では中井と三木の関係を通時的に眺めることで「可能である」を実際に実現し、三木からの影響をここでは反映していると考えている。また別の拙稿後藤 (2017b 24) ではこの図そのものがでてくるが、こちらの論文の方は「委員会の論理」との比較の方に焦点があり、この部分との関連させた形での三木への言及はない。

- 16) 「言語」「発言形態と聴取形態ならびにその芸術的展望」だとそういう問題意識があるが、「委員会の論理」だとヘーゲル弁証法はミッテルであるという肯定的評価に変わるが、その点は改めて論じる。なお栗原 (2004) はヘーゲル弁証法を「自己実現の過程を説き明かす弁証法」であるとして、次のように述べる。「私たちも、成長するにつれて、そして時と場合によって、立場や境遇が変わるだけでなく、ものの見方・捉え方が変化して行く。ただ、どう変わるか、見極めのつかない〈変化〉ではなく、自己実現に向かう必然的な「展開」だと捉えることのできる論理が弁証法である」(栗原2004 43)。なお、この「私たちも」という「も」とは、哲学史の発展とともに、私たちも、という意味での「も」である。なお栗原はギリシア哲学者の納富信留がソクラテス弁証法もそういうヘーゲルのような意識の弁証法につづるものであると考えていると記す。「ソクラテスの対話は、(・・・) 私たち一人がになう知の可能性を対話によって導き出しながら、自らの内から実現させる企て」(納富信留『哲学のエッセンス・プラトン』三一頁)であるように、ヘーゲルの弁証法も、意識が理性へと発展する過程の中で、自ら制約のない認識へと超出するからこそ、内在的なのである」(栗原 2004 98 [(・・・)は栗原記])。しかし納富のその著書はソクラテス自身とプラトンに記されたソクラテス自身とを峻別し対比的に捉えていて、後者のみを意識の弁証法につづるものとして考えている。「ソクラテスとプラトンとの出会いは、また、言葉を語ることと書くことへのへだたりと「対」として現れる」(納富 2002 28)。当然「語ること」はソクラテス、「書くこと」はプラトンで、この師弟のコミュニケーション・思考様式を「対」として納富の方は捉えている。なお、このフレーズは先に本文で引いた中井「転換期の美学」からの以下の文章にも照応しよう。「この弁証法に、われわれの見るということ、あるいは聞くということが深い関係を

もってこようとする」(中井 1965 300)。要するに内面的弁証法に「見る」を、外面的弁証法に「聞く」を中井は当てはめていると考えられるが、前者は視覚優位で(本稿筆者のこの表現はオングやマクルーハンを意識している)「書く」とペアであり、後者は聴覚優位で「言葉を語ること」の受動的側面であるといえよう。先の納富に戻ると、納富は、「書かれた言葉」としての対話篇を軽視する態度は「対話」という哲学のあり方を根本的に見損なってしまう」(納富 2002 30)として、「プラトンによるソクラテス」の、ソクラテスそのものとは異なる意義なり価値を強調する。「対話そのものが人と人とのギャップをあらわにするのである。・・・そして、語られる言葉がもつそのような限界は、それが書かれることにおいて、はじめて自覚されるのである」(納富 2002 32)。このようにオーラルなコミュニケーションの疎隔状況を照らし出すものとして書き留められた対話の積極的意義を認める。しかしそれと同時に納富はソクラテスそのもののプラトンと異なる意義も忘れない。ソクラテスの対話を納富は次のように評する。「人と状況は対話をつうじて変化していく。対話をかわした人のあり方は、もはや以前のものではありえない。人が形作る対話の言葉は、またその人を形作るものなのである。対話は、二度とくり返されることはない」(納富 2002 28-29)。他方プラトンを次のように評する。「これに対してプラトンは、語られる言葉を書かれた言葉にして残した。・・・私たちの心のなかには、思考という新たな対話が生み出された」(納富 2002 29)。このように納富はソクラテスの対話とプラトンの対話篇それぞれの価値を認め、なおかつ両者を別のものとして捉える。なお、中井は「言語」(1927/1928)でこのようなプラトンの二重性(中井 1981a 221)(ここのテキストは本稿本文6章の第2パラグラフで引いてある)、そしてそれがヘーゲルの弁証法へとつうじる(中井 1981a 245)流れを描いていると思われるが、その点については改めて別稿で論じたい。

- 17) 中井のこの論文は『理想』1932年9月号掲載の論文で三木の最初に構想力に論究した論文と内田がいう「世界観構成の理論」が同じ雑誌の1933年4月号ゆえ、三木が中井を意識していた(後輩から先輩への)逆影響の可能性も、少ないながらも否定はできない。
- 18) モルフェ(μορφή)は、形状。ビジョンを思いつかせる形。ビジョンや形は構想力とも結びつくので、集団化した構想力をここで中井は想定している可能

性もある。

- 19) また三木がブレインとして仕えた近衛文麿自身、マルキストの河上肇教授に憧れて東大から京大に転学したという経歴の持ち主(さらにクェーカーでのちに国際連盟事務次長にもなる新渡戸稲造校長に憧れて、華族であるのに学習院中等科から、学習院高等科ではなく一高に、進学した。よって三木と同様、一高、京大卒)であるにもかかわらず、意図はともあれ結果としては軍部の独走を食いとめえなかったばかりか実質的には後押しさえした。
- 20) 後藤(2017a)並びに本稿注2)参照。

## 参考文献

- 稲葉三千男(1987).『マスコミの総合理論』創風社。
- 稲村徹元(1981).「年譜」『中井正一全集第四巻』美術出版社, 372-375.
- 大窪一志(2016).「媒介 Mittel と媒体 Medium」(2016年6月13日)「単独者通信 脱近代を生きる」(<http://neuemittelalter.blog.fc2.com/blog-entry-106.html>) (最終閲覧日2018年9月30日)
- 苅部直(2014).「技術・美・政治:三木清と中井正一(科学と政治思想)」『政治思想研究』(14), 65-81.
- 栗原隆(2004).『ヘーゲル—生きてゆく力としての弁証法』NHK出版。
- 後藤宏行(1977).『転向と伝統思想』思想の科学社。
- 後藤嘉宏(2005).『中井正一のメディア論』学文社。
- 後藤嘉宏(2006).「三木清の公共圏の構想と中井正一—二人の商業ジャーナリズムへの距離の置き方の違いを軸にして」『図書館情報メディア研究』4(1), 1-27.
- 後藤嘉宏(2008).「中井正一の理論にみられる三木清『パスカルにおける人間の研究』(1926)からの影響について」『図書館情報メディア研究』6(1), 27-41.
- 後藤嘉宏(2016).「中井正一におけるメディウム、ミッテル概念の関係性を再考するために—「脱出と回帰」(1951)等の再検討と「メディウムに支えられたミッテル」」『図書館情報メディア研究』14(1), pp.61-79.
- 後藤嘉宏(2017a)「中井正一「委員会の論理」の「印刷される論理」の二面的側面について」『出版研究』(日本出版学会)47, 1-22.
- 後藤嘉宏(2017b).「中井正一の「委員会の論理」(1936)において、なぜ「芸術」の語が出てこないのか?

- 一「芸術における媒介の問題」(1947)等との比較を通じて一『図書館情報メディア研究』14(2) pp.15-36.
- 後藤嘉宏(2018)。「中井正一「委員会の論理」(1936)における嘘言の媒介について」『情報メディア研究』(情報メディア学会)16(1) pp.41-69.
- 小林大州介(2014)。「タルド、シュンペーターと発明の社会学:20世紀初頭における新奇性の社会動学」『Discussion Paper, Series B』(北海道大学大学院経済学研究科)133巻、pp.1-16.
- 佐藤卓己(2013)。「物語 岩波書店百年史2「教育」の時代」岩波書店.
- 杉山光信(1983)。「思想とその装置1 戦後啓蒙と社会科学の思想」新曜社.
- 田邊元(1999)。「西田先生の教えを仰ぐ」上田閑照ほか編『西田哲学選集別巻2』燈影舎. pp.66-95.
- 鶴見俊輔(1959)。「思想の発酵母胎」『思想の科学』1959年7月号(第4次7号), 30-39.
- 鶴見俊輔・栗田勇・佐々木基一・多田道太郎・永井潔・野間宏(1963)。「中井正一とわれわれの時代—座談会—民主主義の未来形—」『思想の科学』1963年5月号(第5次14号), 71-89.
- 轟孝夫(2017)。「ハイデガー『存在と時間』入門」講談社現代新書.
- 中井正一(1965)。(久野収編)『中井正一全集第二巻—転換期の美学的課題』美術出版社.
- 中井正一(1981a)。(久野収編)『中井正一全集第一巻—哲学と美学の接点』美術出版社.
- 中井正一(1981b)。(久野収編)『中井正一全集第四巻—文化と集団の論理』美術出版社.
- 西谷啓治(1999)。「西田哲学をめぐる論点」上田閑照ほか編『西田哲学選集別巻2』燈影舎. pp.164-202.
- 中倉智徳(2008)。「ガブリエル・タルドの『経済心理学』における労働概念について」『Core Ethics』(立命館大学大学院先端総合学術研究科紀要)vol4., pp.227-236.
- 中村雄二郎(2001)。「西田幾多郎Ⅱ」岩波現代文庫.
- 納富信留(2002)。「哲学のエッセンス プラトン 哲学者とは何か」NHK出版.
- 廣松渉(1989)。「『近代の超克』論」講談社学術文庫.
- 三木清(1954)。「人生論ノート」新潮文庫.
- 三木清(1957)。「哲学ノート」新潮文庫.
- 三木清(1967a)。「三木清全集第五巻」岩波書店.
- 三木清(1967b)。「三木清全集第八巻」岩波書店.
- 門部昌志(2014)。「中井正一における言語論への移行の問題(1) 中間者をめぐって」『研究紀要』(長崎県立大学国際情報学部)(15), 69-84.
- 山内得立(1937)。「体系と展相」弘文堂.
- 山田正行(2018)。「三木清の生と死: 聖の遍在(Allgemeine das Heilige)のもと時を生き死ぬ(zeitigen)」『大阪教育大学紀要 人文社会科学・自然科学=Memoirs of Osaka Kyoiku University』66, 151-169.
- 山田宗睦(1975)。「昭和の精神史—京都学派の哲学」人文書院.
- リッケルト(1898→1939)。「佐竹哲雄・豊川昇訳『文化科学と自然科学』岩波文庫.

(平成30年9月30日受付)

(平成30年11月19日採録)